

令和 6 年度 福島大学基金研究推進事業助成による成果報告書

2024 年 8 月 2 日

学 長 殿

所属部局・職名

(所属・学年) 人間文化専攻 地域デザイン科学研究科・M2

申請者名

(学会参加助成の場合は参加者名)

手塚 健斗

助成の区分 (該当するものに○)	学会参加助成・学術出版助成・学術論文掲載料等助成
事業名	日本学校教育学会 第 38 回研究大会 (於：白百合女子大学)
成果の概要	7 月 27 日の自由研究発表において、「五感を活用する〈読み〉の実態調査 ―小中高の発達段階による差異―」という題目で発表を行った。 国語科の教科書の手引きでは、学習者に視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚を活用して教材を解釈するように促す記述が見られる。また、国語科の授業における言語活動においても、〈五感を活用する読み〉が行われている。しかしながら、〈五感を活用する読み〉が習得されているのか、俳句の鑑賞文において大学生を対象に調査を行ったところ、大学生にこの読みの方略が習得されていないことがわかった。 それでは、小学生、中学生、高校生では、〈五感を活用する読み〉の方略が、どれくらい習得されているのであろうか。俳句という高度な文芸ではなく、シンプルな調査問題を用意し、小中高の学習者を対象として、実態調査を行った。すると、次の 2 点が明らかとなった。 1 点目は、発達段階が上がるにつれて、〈五感を活用する読み〉を習得している学習者が増加すること。 2 点目は、修飾語の有無が学習者の〈五感を活用する読み〉に影響すること。 本発表では、この実態調査の成果と課題を発表した。 学会で全国各地から集まった参加者からは、「読みの授業で心情を読み取る場合、〈五感を活用する読み〉は有効であろう。この読みと書くこととの関連はどうなるのか。」等のご意見をいただくことが出来た。頂戴した意見を参考に、今後、研究プログラムを考案し、その検証授業を実施していく。